



 **テイクセン2014 REVIEW**

ごあいさつ

私が初めてこのデザセンを体験したのは今から10年前です。

それは徳山詳直前理事長から「宮島くん、大学の理念を具現化している大会があるんだ。

だからぜひ見てやってくれ」と言われたのがきっかけでした。

またその時「芸術やデザインで世界を平和にする」と途方もない理想も言っておられました。

本当にそんなことが可能なのか私は半信半疑でしたが、

初めて決勝大会を見てその考えが払拭されるほど感動したのを今も覚えています。

この世知辛い世の中で、高校生諸君は困っている人や地域の人々の問題に目をむけて

思いをはせる想像の力と思いやりの力を示してくれました。

またどんな困難な問題もアイデア次第で解決できる、新しいものごとを生み出す創造の力を示してくれました。

理想は現実化できる。2つのソウゾウリョク（想像力と創造力）があればきっと世界は変わる。

私はそう確信し、以来この大学に立ち続けています。

実はその徳山前理事長が先週お亡くなりになりました。享年84歳でした。

晴れの席でしめっぽい話になりますが、皆さんで哀悼の意を表したいと思います。

このデザセンは、その徳山前理事長が命を賭けて守り育てこられた大会です。

本日の君たちの有志をみて、空の上から「見事だ」と呵呵大笑されていることと思います。

徳山前理事長は私たちに、デザセンを通して芸術立国という大いなる理想を示し続けてくれました。

そしてこれからも、デザセンを経験してきた高校生諸君が思いを受け継ぎ、

社会を笑顔に変えてくれる、世界を平和にしてくれると確信しています。

私たち東北芸術工科大学は徳山前理事長の遺志を継ぎ、ソウゾウリョクあふれる若い人たちを最大限応援し、

一緒に世界を変えていきたいと思っています。

宮島達男（全国高等学校デザイン選手権大会開催委員会会長）

※デザセン2014決勝大会あいさつより（2014.10.26）



TOPICS “あたりまえ”を見直す1日『Sexchange Day』が実現！

デザセン2013で優勝した私たちの提案『Sexchange Day』を、母校の山梨県立富士北稜高等学校で、昨年の11月11日に実施しました。「Sexchange Day」とは、「男らしさ」「女らしさ」の象徴となる制服を入れ替え、いつもとは違う感覚を味わう経験を通して、「あたりまえ」や「常識」を見直す1日のこと。提案メンバーの後輩を中心に準備が進められ、全校生徒の約4割に当たる299人（男子117人、女子182人）の参加を得て実現に至りました。男子生徒はスカートを着用した時の足元の寒さ、女子生徒はネクタイによって喉元が引き締められるなど、いつもはわからない互いの気持ちを感じた人が多く、このプロジェクトを体験することで得た新鮮な感覚で、自分自身や身の周りを見直す機会となりました。

レポート：渡邊紀子（優勝メンバー／東北芸術工科大学コミュニティデザイン学科1年）



TOPICS DDP 特別賞でデザイン交流プログラムに招待

韓国・ソウルの DDP (東大門デザインプラザ/ソウルデザイン財団運営) で、2014年12月21日に『DDP 青少年創意デザインプログラム』ワークショップの成果プレゼンテーションが行われました。狭くて消防車が通れず火事が頻発する東大門に花壇をつくるアイデア、廃れがちな東大門に若い人の目を向けるデートマップ、衰退する東大門アパレル産業に注目を集める布リサイクルメモ帳など、映像を駆使しエンターテイメント豊かでドラマチック、情熱的なプレゼンテーションでした。日本からデザセン2014上位入賞3校の伊東高等学校城ヶ崎分校、岐阜総合学園高等学校、市川工業高等学校が招待され、受賞プレゼンテーションを披露。高校生や先生同士の意見交換もある、実り多く美味しい交流となりました。

レポート:マエキタミヤコ(デザセン審査員/サステナ代表)



CONTENTS

- 02 ごあいさつ
- 03 トピックス
- 06 入賞提案
- 16 入選提案
- 20 審査講評
- 24 入賞校の先生方の声
- 26 大会資料

デザセン2014 REVIEW

第21回 全国高等学校デザイン選手権大会 報告書

QRコードから動画をご覧ください。



P.6～14にあるQRコードを携帯電話で読み取ると、各チームのプレゼンテーションを映像でご覧いただけます(パケットプランにご注意ください)。大会公式ホームページでは、過去大会で入賞した提案の内容もご覧いただけます。

『体幹トレーニング・ぞうきんがけ世界一周』

伊東高等学校城ヶ崎分校 (静岡県)

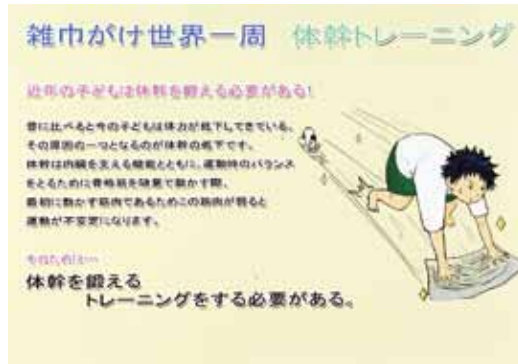
柴レオン (2年) / 小林裕月 (2年) / 松浦茉莉子 (2年) 指導教員: 大津忍 教諭



プレゼン動画を
ご覧ください。

ぞうきんがけで世界一周した気分になれる

近年、子どもの体力低下や運動不足で、体幹や体のバランス力の弱さが問題視されています。体幹を鍛える最もよい方法は「ぞうきんがけ」ですが、最近はモップなどを使うためその機会も少なくなっています。理想的なフォームで行えば、腹直筋、大殿筋、大腿四頭筋、大腿二頭筋、下腿三頭筋なども鍛えられ、体のバランス力や基礎代謝が上がります。そこで、みんなで楽しく目標を持ってできる、ぞうきんがけで「世界一周を目指す」アイデアを提案します。学年やクラス対抗で競い合ったり、世界一周のほかにも、国内旅行、エベレストの高さ、宇宙までの距離など独自の目標を設定しても楽しめます。自分たちが使う学校を自分の手をあてて綺麗にする。そこには心の鍛錬と浄化の効果もあります。母親がぞうきんを縫う姿をみかけなくなった時代だからこそ、作ってもらったぞうきんをポロポロになるまで使う。そんなことにも、何か大切な意味があるように思います。



柴レオン
Leon Shiba

決勝戦進出と聞いてからは、最高のプレゼンしようという使命感に駆られました。チームサポーターの2人と大津先生からプレゼンの極意を教わり、僕ら3人でシナリオの練習をぎりぎりまでやりました。そのかきがあり、楽しみながら堂々と役を演じられました。今回の優勝は、自分を大きく成長させる自信につながりました。これからの世の中を少しでも変えることができたら嬉しいです。



小林裕月
Yuzuki Kobayashi

今回のデザセンが僕にとって初めての大会でした。不安でいっぱい、メンバーの2人に助けられてばかりで迷惑も多かかったと思います。この優勝はメンバーや先生、スタッフの皆さんなどたくさんのサポートがあってこそその結果です。デザセンを通して得た経験を、これからの自分の将来に活かせるように努力します。また、僕たちのプレゼンでぞうきんがけの見方が変わった人がいれば嬉しいです。



松浦茉莉子
Mariko Matsuura

気づいたら二次審査を通過していて、最初、全国大会に行く実感が湧きませんでした。たくさんの人に見られながらプレゼンなんて、きつとセリフを言い間違えたりするんだろうと思っていましたが、準備も練習も本番も、メンバーや先生、チームサポートの方、スタッフに助けてもらい、いつも以上のプレゼンをすることができました。今回の結果は、私自身に大きな影響を与えてくれたと思います。

『アプリで変える地方自治』

岐阜総合学園高等学校 (岐阜県)

濱崎瑞樹 (1年) / 藤垣成汰朗 (1年) / 鈴木郁哉 (1年) 指導教員: 石井正人 教諭



プレゼン動画を
ご覧ください。

わかりにくい地方議会をアプリで「見える化」

地方議会は私たちの暮らしに直接関わる問題を扱う最も身近な存在ですが、地方の情報になるほど私たちの関心は薄れがちです。人々が地方議会に興味を持っていないのは民主主義国家にとって大きな問題ですが、その要因の一つに、議題が98%以上の割合で可決されることや、マスコミもほとんど取り上げない、注目度の低さも原因と考えられます。実際、情報公開や、インターネット中継も行なっていますが、公平性を保つために一字一句漏らさず開示するわかりにくい形式にとどまっています。そこで、いつでも簡単に見ることができてわかりやすい、アプリを使った公開方法を提案します。議題や議員の発言状況、プロフィールや政治活動費の報告、税収と使い道などの情報を整理し、地方政治をアプリで「見える化」します。昨今、地方議会や議員の問題が数多くおきていますが、その議員を選んだのは有権者です。有権者が地方議会のことを知って、よりよい政治となる架け橋になります。



なぜ、アプリなの?

+いつでも、どこでも、手軽に見ることができる
+国が一括して開示して各地方議会が運用すれば、効率的
+スマホ普及率が高くなってきたし、今後伸びる事が予測される

アプリの機能は?

- 議会の内容
- 議員に対する有権者の意見
- 議会の使い道
- 過去の議会記録
- 議員の紹介
- 政治活動費等の各種報告
- 選挙時は情報提供
- 意見の返信

まとめ

国会議員が約700名なのに対して、地方議会議員は約34500人と圧倒的に多い。地方議会に関心を持つということは、民主主義の根幹にかかわる問題。関心を持てるようになるには、最低でも情報提供をしっかりと分かりやすく行う必要がある。そんな情報提供を手助けするのが、このアプリなのだ。



濱崎瑞樹
Mizuki Hamasaki

世の中の問題点や解決策を考えるよいきっかけになりました。そして、会場の皆さんにわかりやすく情報を伝える重要性を感じました。所属している部活動でも、人にメッセージを伝えることの大切さを感じているので、今回学んだことは部活をはじめ、たくさんの方に活かしていきたいです。決勝大会までの取り組みでは不安が絶えませんが、準優勝という結果でとても嬉しかったです。



藤垣成汰朗
Seitaro Fujigaki

何気なく参加したこのコンテスト。正直、決勝大会まで行けるとは思っていませんでした。なので、決勝大会へ進出することが決定した時は驚愕しました。ここまで来たら、最後まで全力でやりきるという気持ちで決勝大会まで取り組みました。その頑張りが報われて、準優勝という結果になったのだと思います。僕たちに協力してくださったチームサポートの方に感謝しています。



鈴木郁哉
Ikuya Suzuki

当初は決勝大会に進めるとは思っておらず、進出が決まった時は驚きました。僕たちが提案した内容は政治という堅い話題で、上手く伝えられるかどうか心配でした。だから、シナリオの見直しや話し方などを工夫して、皆さんに興味を持ってもらえるように努めました。その結果が準優勝になったと思います。他の学校のプレゼンはどれも興味深いものばかりで勉強になりました。

エル・ジー・ピー・ティー
『LGBT WRAPPING』

市川工業高等学校 (千葉県)
北島菜々 (3年) / 中村あすか (3年) / 森山菜々 (3年) 指導教員: 金子裕行 教諭



プレゼン動画を
ご覧ください。

「LGBT」って知っていますか？

「LGBT」は、レスビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダーの人々の総称です。日本人の「LGBT」の割合は、左利きの日本人の割合の5%とほぼ同数。そう考えると身近に感じますが、適切な教育環境が整っておらず、また「LGBT」の人々を、曖昧な知識と偏見の目で見てしまいがちです。また「LGBT」の当人たちも自分たちは普通じゃないと思込み、自殺を考えた人も少なくありません。そこで、「LGBT」の生き方への尊厳と社会運動を象徴する意味を持つ「レインボーカラー」のラッピングキャンペーンを行います。「LGBT」で悩みをかかえる人々の共通の願いは、「まずは私たちの存在をわかってほしい」という思いです。このキャンペーンで「LGBT」のことを知りたいと思う人が増え、「LGBT」の人々の手助けの第一歩となるよう、レインボーカラーのラッピング商品の開発と普及の流れを作り、「LGBT」の正しい情報や知識を知ることができる仕組みを提案します。



北島菜々
Nana Kitajima

私たちのプレゼンの一番の目的は、「LGBTの人たちがいるということを知ってもらいたい。わかてもらいたい」ということでした。私たちのプレゼンの様子がニコニコ生放送で全国配信され、それを見て、「LGBT」のことを知ってもらい、高校生が「LGBT」について真剣に向き合っていることがわかってもらえただけでも、今回山形でプレゼンができて本当によかったと思っています。



中村あすか
Asuka Nakamura

「LGBTってなに?」私たちもここから始めました。終わりのない難しい問題に取り組み、私たちに解決案を出したことに大きな意味があると思います。今回の活動を通して、たくさんの人に「LGBT」を知ってもらい、私自身もすごい体験をし、大きく成長できたことがとても嬉しいです。色々な方の協力があってこそ、私たちのプレゼンだったと思います。とても楽しかったです!



森山菜々
Nana Moriyama

この課題を取り組む前、私は「LGBT」という言葉を知りませんでした。「LGBT」を知っていくうちに、私自身いろんなことを考えさせられて、言葉では表せない複雑な気持ちになりました。難しいテーマだったからだと思います。「LGBT」を知ってもらうために山形まで行ってプレゼンできたのは、きっとこの先忘れることはないです。協力してくれた皆さん、本当にありがとうございました!

『地球絵日記』

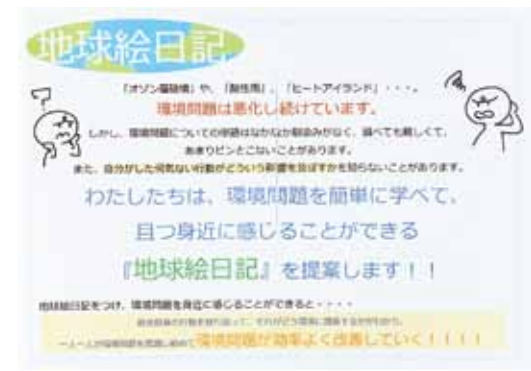
北海道札幌平岸高等学校 (北海道)
柳橋るな (2年) / 野村汐音 (2年) / 石川萌 (2年) 指導教員: 吉岡隆 教諭



プレゼン動画を
ご覧ください。

環境問題とのつながりを考え学ぶ絵日記

地球の環境問題は、日々悪化し続けています。森林伐採や環境汚染は、すべて人間の生活が関係しています。でも自分とは無関係だと思ひ、知らず知らず環境を汚染しているかもしれません。私たちは、毎日の自分の生活が環境へどのように影響しているかを知る「地球絵日記」を提案します。使い方は普通の絵日記と同じ。まずはその日の行動を、文章と絵で書きます。次にその内容を、環境に対してプラスになる行動とマイナスになる行動に判別し、マイナスの行動には大気汚染の絵がデザインされた環境シート、プラスの行動には美しい地球をデザインした環境シートを1日1枚貼っていきます。なにげない日常生活を環境シートで視覚化することで日々、個人が環境とのつながりを自覚することができます。また1人でも書き続けるモチベーションが持てるよう、エコグッズがもらえるキャンペーンや、日頃の取り組みを発表しあう環境保護大会などを地球絵日記と連動して開催します。



野村汐音
Shione Nomura

今回このデザセンに参加させていただき、貴重な体験をさせていただくだけでなく、私たちのテーマである環境についてよく考え、沢山エコについて知ることができました。今まで気にしていなかったゴミの細かい分別やエコバックを持ち歩くこと、消えていない電気があれば消すこと、水を止めることも気にするようになりました。上位入賞はできませんでしたが、とても楽しく参加できました。



石川萌
Moe Ishikawa

はじめは不安や緊張がとても大きかったのですが、本番では先生や友だち、学生サポートの方々の力強い励ましや応援をうけて、自分の力を精一杯出すことができるとてもよかったです。発表に向けて、自分の知らないエコ活動を沢山知ることができて、とても有意義な期間でした。他の出場高校のプレゼンテーションもとても楽しく、貴重な体験をすることができました。ありがとうございました。

『コミックダイアリー』

東京都立総合工科高等学校（東京都）
 松岡溪（2年）／田代歩夢（2年）／永田健人（2年） 指導教員：久世佳史 教諭



プレゼン動画を
ご覧ください。

大切なあの日の気持ちを留めて共有できる日記

コミックダイアリーは、絵が上手に描けなくても、シールや写真、新聞の切り抜きを使って、日本のマンガの手法で描く、誰もが描きやすく続けやすい、そして読んで伝わる日記です。例えばクラスの学級日誌をコミックダイアリーにすれば、1人の思いを大勢に楽しく伝えることもできます。また1枚の紙と鉛筆さえあればみんなが描くことができるシンプルな方法なので、敵対する国の子どもたちがお互いの日常を描いて見せ合うことで、互いの文化の違いをわかり合い、新しい発見につながるツールにもなります。コミックダイアリーは、描いた人の気持ちや境遇を共有できるマンガというシステムを使った心のコラボ集。描いた人は、何も起こっていないと思っていた日常が、実はドラマにあふれていることに気が付きます。日記の面白さは絵を描く技術ではなく、個性です。その個性を活かせるコミックダイアリー、あなたは誰と何を描きますか？



松岡溪
Kei Matsuoka

決勝出場を聞いた時は、正直できるとは思っていませんでした。大勢の前で話すことが苦手、想像するだけで辛かったです。様々な準備を詰まったスケジュールの中で行い、不安の中でステージに立ちました。結果的に思ったよりもよく発表でき、後の交流会でも様々な人たちと交流ができました。この場で学んだこと、経験したすべては、将来きっと様々な場で役立てることができると思います。



田代歩夢
Ayumu Tashiro

平成26年10月26日、何があったかと言えば、高校生活で最も大規模かもしれない出来事があった。それは、部活で出たアイデア「コミックダイアリー」によって、デザセンの舞台に出たことだ。実力不足の自分には早すぎる場所だったが、今までにない経験と新しい感覚を得ることができた。今回得た人との信頼とか機会に恵まれたこともあって、やっぱりよかったと思える素晴らしい思い出となった。



永田健人
Kento Nagata

最初の頃はアイデアも出ず、本当に完成するか不安でした。ですがひとつの方向が見え始めると、どんどんまとまり始めて「コミックダイアリー」というシステムが完成。そしてシナリオや小道具も完成していくと、終わるころには辛かったことが「楽しい」という気持ちになりました。本番も楽しい気持ちのまま挑むことができました。この経験を活かして、来年も決勝まで行きたいと思います。

『リサイクルシティ』

静岡県立科学技術高等学校（静岡県）
 兼森洸樹（2年）／杉山拓哉（2年）／鈴木彩楓（2年） 指導教員：秋山純子 教諭



プレゼン動画を
ご覧ください。

古材の新たな循環が暮らしを変える

日本で排出されるゴミの多くは、建設業や農林業から出る木材のゴミです。国土の3分の2を覆う森林を持続するには管理が大切ですが、管理で間引かれた間伐材のほとんどが捨てられている現状にあります。そこで、繊維を縦横に組み合わせコンクリート同様に大きな建築物にも使える強度を持つ「CLT」(Cross Laminated Timber)に着目しました。国内ではまだ建築使用への認可を検討中の技術ですが、間伐材と古材の管理を木材センターが一括管理することで、通常は間伐材だけで作られる「CLT」を「古材」で作り、環境にやさしく限られた資源を有効活用する循環を生み出せるのではないかと考えました。「古材」は、その価値を知らなければ単なる廃材。その価値を知る人は多くはありませんが、街頭インタビューでも、価値を伝えていくことで受け入れてもらえる可能性を感じました。「古材」を用いた「CLT」が木のさらなる循環を生み、私たちの暮らしを変えていきます。



兼森洸樹
Koki Kanemori

決勝進出が決まった時は、不安はありませんでした。二次審査の段階で内容がはっきりしていなかったのが、本番までの1ヶ月半はとても大変でした。友だちや先生、色々な方々に支えていただいたおかげで、決勝という大きな舞台上でプレゼンすることができました。こんな大勢の前でプレゼンするのは初めてで緊張しましたが、減多に体験できることではないので、とてもよい経験になりました。



杉山拓哉
Takuya Sugiyama

このデザセンを通して、人にも伝える難しさを強く実感しました。決勝大会進出が決まってからいろいろな人に話を伺い、情報を集めるところからのスタートだったので、とても苦労しました。また、それらの情報を言葉にするのが本当に難しく、何度も作り直し、周りの方々のおかげでなんとかプレゼンを完成させることができました。こんな大きな舞台でのプレゼンはとてもよい経験になりました。



鈴木彩楓
Ayaka Suzuki

こんなに大きな大会に出場させていただいたのは初めてで、楽しみ！という気持ちとどうしようという気持ちになりました。しかし、こんなにも人と意見を交わす時間が持てたことで、自分の意見を持つことやほかの意見を尊重すること、人に伝えることの難しさや大切さを改めて実感することができました。本番も、楽しんでプレゼンすることができました。終わった後の達成感は忘れられません。

『結婚応援ファンド』

大阪市立中央高等学校（大阪府）

星野健太（3年）／藤田理香（3年）／高山雄司（3年・サポートメンバー） 指導教員：安東裕二 教諭



プレゼン動画を
ご覧ください。



結婚までの幸せをみんなでサポートする保険会社

厚生労働省の調査によると、結婚件数は現在、昭和47年の110万件から44万件へと大幅に減少しています。結婚式で平均的にかかる300万円の費用も大きなハードルとなり、結婚に夢が持てない状況です。「結婚応援ファンド」は、結婚したいと願う2人を資金援助で応援するシステムです。2人の出会いや様々なエピソードをウェブサイトで公開し、そのエピソードに共感し、応援したいと思うサポーターたちがお金を出し合い、夢を叶えてあげます。1人の投資額が少なくても多くの人の共感を得られれば大きな資金となることでしよう。個人サポーターだけでなく、結婚産業や旅行会社が格安で商品を提供する代わりに宣伝に活用したり、農業に興味を持っているカップルには土地や家を提供するなど、農業支援で応援と結びつけることも考えられます。結婚応援ファンドは人々の愛をサポートする新しい形。応援されることで応援する気持ちが生まれる幸せと思いやりの保険会社です。



星野健太
Kenta Hoshino

準備期間からぐだぐだしていた中央高校チームです。とりあえず、何とかプレゼンができてほっとしています。自分自身、文章を考えるのが苦手でしたが、先生や学生サポーターたち、他のメンバーと協力してシナリオを完成させました。正直、プレゼン自体に悔いはありません。なぜなら、あの時の自分が思う最高のプレゼンができたから。これをよい機会に、今はいろいろなことに挑戦しています。



藤田理香
Rika Fujita

過去の入賞作品を見て、「自分には絶対無理だ、まず入賞なんてしないだろうなあ」という気持ちで応募し、気がついたら山形にいて当日まで自分が発表するという自覚がありませんでした。当日は他のチームのプレゼンに圧倒され、少し後悔したのを覚えています。けれども今になってみるとよい経験ができて、自分の知らなかったこともたくさん知ることができました。皆さん本当にありがとうございました。

『マスク MONDAY @ 商店街』

米子工業高等専門学校（鳥取県）

中村佳世（3年）／服部愛（3年）／足立香織（3年） 指導教員：西川賢治 教諭



プレゼン動画を
ご覧ください。

「顔」をかくして「心」は見せて

「あなたはコミュ障（コミュニケーション障害）ですか？」というアンケートを高校生にとったところ、半数以上が「はい」と答え、自分がコミュ障だと思っている人々が意外と多いことに驚きます。そんな人々が気軽に会え、同時に商店街の活性化にもつながるイベントを提案します。地元の商店街をステージに、コミュ障の人々が顔を隠せるマスク（仮面）をつけて集合。商店街の中を歩きまわって同じ柄のマスクの人と出会い、ゲームをしながらコミュニケーションします。またコミュ障は初対面の人と話す時に特に緊張するため、出会っただけでは会話は弾みません。そこで、会話を誘発させる仕組みとして、スタンプや割引券をもらうため様々なお店を回ります。参加者は商店街を回遊しながら仲を深めることができると同時に、どんなお店があるのかを知るきっかけになります。そして、その場面に通りかかった人にも商店街に興味を持ってもらえるかもしれません。



中村佳世
Kayo Nakamura

出場が決まった時はとても驚きました。本番まで紆余曲折がありましたが、この3人でやってこれて本当によかったと思います。右も左もわからない状態からのスタートでしたが、デザインを作り出すプロセスの面白さ、大変さを学んだ大会でした。今回の大会で学んだ多くの内容をこれからの糧にして、人が幸せになれるようなデザインについて、これからも考えていきたいと思います。



服部愛
Ai Hattori

授業の一環でなかったら一生この大会を知らなかったかもしれない状態から、全国大会に出場し、終わった今でも、出場したことが夢のようです。この『マスク MONDAY』という案は現実味もなく、とてもアホな案です。しかし私たちは模擬実験を行い、現実でも可能だということを証明できました。どんなに現実味がなくとも、やろうと思えばできることがわかりました。物は試しです。Let's challenge!



足立香織
Kaori Adachi

グループで企画をすること自体初めてだったので、楽しい反面、衝突することも多々ありました。しかし、具体的に社会の問題を考えたり、実際に企画を実施したりと高校生の間にこのような体験ができたことは、将来必ず活かされるはずで、大会に参加して、デザインの形が多様なことを知り、考えることの楽しさや難しさを身を持って感じることができました。

『シャッターチャンス』

有田工業高等学校 (佐賀県)
古川柗太 (3年) / 梶原颯子 (3年) / 太田実玖 (3年) 指導教員: 森永昌樹 教諭



プレゼン動画を
ご覧いただけます。

シャッター商店街 × 若者起業家 = 新しい街づくり

昔は、多くの人で賑わいコミュニケーションの場となっていた商店街。現在、大型スーパーマーケットの建設や後継者不足によりシャッター商店街が増加しています。特に今問題視されているのが、若者起業家の減少です。不景気な時代に育った私たち若者は、起業という大きなチャレンジに消極的になりがちです。若者が起業しやすくなるよう、必要なお金や契約、経営面などをアドバイスするサポート部、起業者と店舗をつなぐマッチング部、SNSでお店＆商店街の宣伝を行う宣伝部、全国の商店街と起業家のデータを収集・管理し各部へ提供する統計部、統計部の情報から商品開発のアドバイスなどを行うイベント部からなるサポート事務局を開設し、大きなリスクを背負わなくても、まずは「やってみたい」という些細な気持ちからスタートできるサポートを行います。そしてこのビジネスモデルを通して、様々な世代のコミュニケーションの場を創出していきます。



古川柗太
Shuta Furukawa

全国レベルの大きな賞をとったことがなかったし、プレゼンなどの人前で発表することが苦手だったので、自信がありませんでした。ですが、メンバーの2人が支えてくれたので作業も順調に進み、本番をむかえることができました。本番では、セリフが1回飛んでしまったのが残念でした。上位入賞は逃しましたが、自分はデザセンを通していろいろな経験を少し成長できたと思いました。



梶原颯子
Satsuko Kajiwara

中学3年の時にデザセンを見て、ずっと「デザセン決勝に出場したい!」と思っていました。出たいと思っはいたものの、よく考えると何もできない私。準備中は「あまり話したことのない2人とチームで大変だ」と思っていたのですが、この3人だったから浮かんだアイデア、多くの学びがありました。多くの人にプレゼンを見ていただき、審査員の方々に意見をいただいたことも貴重な体験となりました。



太田実玖
Miku Ota

決勝進出を聞いた時は、あまりの衝撃でぼかんとしました。でも本番が近づくにつれて、嬉しさの反面不安もありましたが、当日はあまり緊張せずにスムーズなプレゼンができたと思います。決勝に行けたのは、メンバーの2人と担当の先生のサポートがあったからこそ。また、山形では学生スタッフの方にもお世話になりました。結果は少し残念でしたが、たくさんのことが学べた大会でした。



『空と一緒に待つ時間』

九州産業大学付属九州高等学校（福岡県）
熊谷美紀（2年）／永村有理果（2年）／牟田口咲希（2年）

LED 信号が普及し、アニメーションを見せることも可能です。信号機の各色の中で植物が成長したり、果物が虫に食べられたり、色んな花が咲いていく。地域や時間帯でデザインを変えたりもでき、信号を待つ時間が楽しくなり、日常生活にユーモアを生み出します。

『くらべる大図鑑』

有田工業高等学校（佐賀県）
田中聖夏（3年）／田島優（3年）／田村綾海（3年）

未来はデジタル化がさらに進み、子どもたちは今よりネットに頼り、考える力や想像する力を育む機会は少なくなります。幼い頃から豊かな想像力を育むため、自分の体のサイズや重さを基準として、様々な動物と比べる図鑑を提案。物事に関心を持つ力や視点を誘発します。

『バス停 +』

大分高等学校（大分県）
柳生萌子（3年）／小柳春乃（3年）／衛藤幸恵（3年）

バスを待つストレスに着目した提案です。バス停の看板には時刻表だけでなく、料金表や到着アナウンスもしてくれる機能があれば、バス停で待つストレスが減ります。利用率も上がり自家用車の使用率が少なくなれば、地球温暖化対策にもなります。

『介護福祉ナビマップ』

大分高等学校（大分県）
秋吉志帆（2年）／高橋葵（1年）／宮崎真菜（1年）

介護・福祉に関する情報の少なさを改善するため、条件に合う介護サービスを事前に確認できる福祉施設情報サイトを開設し、施設のサービスや職員情報、口コミなどを提供します。利用者が求める介護サービスと、実際の施設を事前にマッチングできるコンテンツのアイデアです。

『True Day』

佐土原高等学校（宮崎県）
笠井淳史（2年）／浅部祐生（2年）

4月1日のエイプリルフールと日付を逆にした1月4日を、本当のことを伝える日として設定し、昨年の嘘を相手に正直に告白。告白された人は、告白した人に「許しの心」という花言葉を持つラベンダーの香水を吹きかけ、平和的なイメージで解決します。

『1円も積もれば壁となる』

沖縄工業高等専門学校（沖縄県）
倉持有伽（2年）／和泉七海（2年）

世界で苦しんでいる人々を救う方法として「募金」という形がありますが、その成果は数値としてしか発表されず、どれくらい募金されているかは実感しにくいものです。募金 × 壁画を組み合わせて目に見える形にし、募金への意識を高めていきます。

『セックス？ センス！』

高陽芸術高等学校（韓国／高陽市）
シン・ユンジョン（2年）／ジョン・ヘヒョン（2年）

現代社会の青少年たちの性意識は開放的で、初体験の平均年齢も若年傾向にあります。知識がない状況から発生する10代の妊娠や墮胎、性病の問題。それを防ぐ性教育を、理想論ではなく身を守るために必要な事実を、効率的に伝える視点から提案します。

『亀ロボットプロジェクト』

テコッキ美術予備校（韓国／大邱廣域市）
クォン・ヨンジン（3年）／イ・ミジョン（2年）

年末年始の時にだけ貧しい人々を助ける寄付（募金活動）を見かける度に、一方では募金に気軽に近づけない気持ちがありました。年中行事が多い街中や人が多く通る道で、楽しく遊び感覚で寄付できる「亀ロボット」を設置するアイデアです。



審査講評



小山薫堂

放送作家、脚本家 / 東北芸術工科大学教授 ◎審査員長

今回集まった874のアイデアはどれも素晴らしいものでした。結果として勝敗はついたものの、入賞できなかった皆さんは決して悲しい気持ちになることはありません。なぜなら、それがどんな内容であれ、一度自分の中に生まれたアイデアは、いつかきっと役に立つ時が来るからです。アイデアの種を自分の心の中に植えておけば、それは環境や時代という雨風にさらされることで、知らず知らずのうちに成長し、大きな企画として花開くのです。ですから、今回のデザセンに作品を出品したということを、自分の自信にしてください。どうか誇りに思ってください。

僕は皆さんが本当に羨ましいです。好きなことを自由に考えられる時間が、皆さんにはあるからです。大人になると、誰かから依頼を受けて、仕事として企画を考えるという機会が多くなります。必要に迫られて何かを考えなければなりません。けれども皆さんは、高校生の時はもちろん、大学生になっても、自分の身近にある課題を発見し、自由な発想が許される時期です。あと何年間か社会に出るまでは、自由な発想で自分の身の周りにあるものの中から、もっとよくしたいと思うデザイ

ンを考えてほしいと思います。デザセンに出品する作品を考えることは、自分の暮らしの中にヒントを見つける作業から始まります。それによって、日常がもっともっと楽しくなります。そう、デザセンは自分の人生が楽しく見えてくる魔法のメガネでもあるのです。ぜひ、来年も挑戦してください！ たくさんのご応募、お待ちしております。

●こやま・くんどう／代表作に、テレビ番組「カノッサの屈辱」「料理の鉄人」。2008年公開脚本を手がけた「おくりびと」が、第32回日本アカデミー賞最優秀脚本賞、第81回米アカデミー賞外国語部門賞獲得をはじめ、国内外で高い評価を受けた。活動分野は執筆以外にも多岐に渡り、熊本県地域プロジェクトアドバイザー、観光庁観光アドバイザー、下鴨茶寮主人、東北芸術工科大学デザイン工学部企画構想学科長、東京スマートドライバー発起人、ラジオパーソナリティ等。



赤池学

(株)ユニバーサルデザイン総合研究所 代表取締役所長

本年度のグランプリは、伊東高等学校城ヶ崎分校の「体幹トレーニング・ぞうきんがけ世界一周」が受賞した。同校はかつて、「修学旅行のまくら投げ

を公式スポーツに」という、温泉観光地の若者ならではのユニークな提案を行った高校である。先輩たちのDNAを継承する今回の提案は、日本の子どもたちの運動能力の低減が指摘されるなか、高校生のみならず、小中学校でも展開できる、ユニバーサルな体力増強プログラムのデザインである。ぞうきんづくりから始まるこのプログラムは、ものづくりや家政教育にも発展していくことは確実である。また、市川工業高等学校の「LGBT」への着眼には、驚かされた。実は、小社にも複数のゲイ研究員がいるように、クリエイティブの世界には、「LGBT」の人々が結構多い。「粋」「いなせ」「きゃん」の文化には、男性性と女性性の融和がその底流にある。トランスジェンダーへの理解は、単なる差別的払拭に留まらず、コミュニケーションやクリエイティブの醸成にも広がっていくだろう。そして、岐阜総合学園高等学校の「アプリで変える地方自治」は、極めて有用、かつ実現性の高いデザイン提案である。教科書出版最大手の東京書籍と小社は今、キャリア教育や、国際教育、日本のオンリーワン技術など、教科横断型の総合学習支援サイト「Edu Town」を開発している。是非、高校生が地元の議会政治の実際を学び、参画するサイトを、同社にご一緒に提案しましょう。

●あかいけ・まなぶ／ユニバーサルデザインに基づく製品、施設、地域開発等を手がける。「生命地域主義」「千年持続学」を積極的に提唱し、地域ならではの産業技術、人材、地域資源による「ものづくり」プロジェクトの運営にも数多く参画。農林水産省FOOD ACTION NIPPON AWARDや、キッズデザイン協議会キッズデザイン賞の審査委員長なども務める。



大宮エリー

作家、脚本家、映画監督、演出家

今年もデザセンの審査員に呼んでいただき、楽しかった。審査というよりも、皆さんの世の中がもっとハッピーになったらいいなという思いに触れに行ったというか。だからやりたいことって本当はこういうことなのでは？ とか、だったらこうしたらもっとよくなるかも？ などお伝えしました。それも1つのプレゼンであって、正解ではありません。皆さんのプレゼンとアイデアをもとに、意見交換するというようなイメージでした。全体的にいつも刺激をうけ、楽しかったなという印象です。人が一生懸命とりくんだものに触れるのはさすがいしいものです。世の中をよくするなんていう方向のものなのだから、なおさら。でも、もし、来年、参加されるかたにアドバイスをしたら、「こうあるべき」「こうじゃないといけない」という型なんてないよ、ということです。プレゼンも、身振り手振りをつけたもので統一されていますがそんなルールなんてないです。だから、普通に、語りかけるように話してもいいですし、ざっぱりしたもので、伝わると思うんです。みんな、同じように、声を張り、演劇部みたいであるのが気になりました。それから、毎年、ダイアリーが多いですけども

商品化できるものもいい、という決まりも、デザセンの募集要項を読んでみて書いてありませんでした。シャッター商店街をどうにかしなきゃとか、地球の環境について考えなきゃ、というのも多いけれど、もっと独自の問題意識があっというと思うのです。それはスケールが大きくなっていい。ささやかなものでいいんです。だってちょっとしたことが人の心を豊かにすることもありますよね、それだって世の中をよくすることだから。本当に、ふとした疑問、から、アイデアは膨らみます。これって、おかしいよね、どうしたらいいんだろう。そんな個人的な感情、具体的な体験が、その後の、リサーチ、聞き込み、調べ込み、につながるんだと思います。調べるのも、何か文献やデータを調べるのではなくやはり、足をつかって、聞き込みをするのがいいと思います。なぜなら、それは、皆さんだけしかつかみ得なかった情報と発見になるからです。「こうしなきゃいけないだろう」という傾向と対策から離れてまずは素朴な疑問を見つける旅をしてほしいです。難しいことだと思うけれど。だから難しくして結局、それが見つからなくてデザセンに出られなくてもそういう過程こそに意味があると思うのです。あと、それを客観的に見てみて、たとえば他人がそれを提案した時に、自分が、そうだなあ、って思えるかどうか。つまり独りよがりになってないかってこともチェックすると思います。デザセンは、世の中をよくすることでもあるけど、自分をよく知る、ことでもあるんですよね。きっと。

●おおみや・えりー／1975年大阪生まれ。主な著書、『生きるコントI,2』、絵本「グミとさちこさん」、「思いを伝えるということ」、現在、サンデー毎日「なんとか生きてますっ」連載中。◇2012年渋谷PARCOにて個展。1万2千人を動員（その後、札幌、京都、仙台にて開催）◇Ustreamにて

オリジナルの番組「スナックエリー」をママとして配信（毎週月曜22:00）◇J-WAVE 他 JFL5局ネット、「TOYOTA FRIDAY DRIVE WITH ELLIE」（毎週金曜日16:00）にて、パーソナリティー ◇TBS「アーティスト」歌番組の単独MC（毎週水曜日深夜0:28）



杉本誠司

(株)ニワンゴ代表取締役社長

昨年引き続き、デザセン審査員として決勝大会を訪れた。高校生のプレゼンテーションは演出面でもかなりレベルアップしている。デザインテーマも政治や人権問題、婚活にエコ、オトナ顔負けのコンテンツ企画に思わず審査対象が高校生であることを忘れ、つついっ辛い批評になることも…。むしろ、オトナ顔負けというよりは、オトナがちゃんと考えなければならない問題を高校生が問題解決に向けたデザインとしてデザセンに挑んでいる。もっとオトナ諸君が頑張らねば、という思いにかられながらも、さらに今回のデザセンで気になった点がある。どの企画も非常によくまとまって入るものの、「この企画っぽい見たことあるなあ?」的なものが多い、もちろんマネシちゃだめだなどとケチな話

をするつもりではなく、デザインとしての問題提起のテーマ設定はどれもいいのだけど、「ちゃんと解決につながるのかなあ?」という思いと、すでにオトナが取り組んでいるが、「あまりうまくいってないよねこの手の施策」という企画の行く末が頭を駆け巡る。すなわち、何が言いたいかといえば、そもそもケーススタディとなっているオトナの類似的な先行事例が“イケてない”のではないかということが想像され、やっぱり「オトナがんばらないとダメじゃん」という結論につながっていく。理想的なデザインの流れとしては、うまくいっている（あるいはうまくいきそうな）先行事例をキッチリお手本としてオトナが見せつつ、さらに高校生なりの傍若無人なスパイスをガンガンに効かせてデザセン審査員を唸らせる。そんな大人と高校生のデザセンを成立させる関係がいろんな人の幸せにつながっていくのかなーと、審査しながら強く感じた2014年のデザセン。2013年では「高校生はもっとガンバって大人を驚かせよ」的なメッセージを述べたけど、今回2014年の講評(?)は、まずもって僕自身を含めたオトナが頑張ればデザセンがもっとよくなるという理屈のもと、「オトナはがんばって高校生(デザセン)上げてこよう」というメッセージを贈ろうと思います。

●すぎもと・せいじ／1967年3月31日生まれ。気象情報会社のウェザーニュースなどを経て、2003年ドワンゴに入社。モバイル向けのビジネスツールや電子書籍サイトなどの新規事業を担当し、メールポータルニワンゴの立ち上げに携わる。2007年12月社長就任。動画サイト「niconico(ニコニコ動画)」の運営指揮にあたる。株式会社ドワンゴ広報部長、株式会社ドワンゴコンテンツ ニュースプラットフォーム部長。



竹内昌義

建築家／東北芸術工科大学教授

「なんで？」デザインを考える時にもっとも大事なのは何かと考えると、何かに疑問をもつことだと思う。小さい子どもがお母さんに「なんで？」「どうして？」と聞くあの感じである。

ものごとにはいろいろな理由があって、そうなることが多いけど、その理由はなかなか見えない。その理由がわかると、「じゃあ、こうすればいい」と解決策が見つかる。だから、その大もとを知るのは大事なのだけれども、すぐにはわからない。

当たり前に見えることが、そうなるまでに色々な人の努力や研究があってのものだったりする。あるいは、何か新しいものができて、その影響でそうなったものかもしれない。たとえば、インターネットや太陽電池は、私たちの生活やそれに対する考え方を大きく変えつつある。常に同じ状態にあるのではなく、いつも変化しているのだ。考えて考えてもわからなくなった時、ぼくは色々比べながら考える。何と比べるかというと、この人だったら、どう考えたんだろうとか、どう行動したんだろうとか。その人はたとえば、友だちの場合もあるし、自分の母親だったり、外国の人だったり、歴史上の人物だったりする。だから、外国の

ことを学んだり、歴史の本を読むのが好きだ。現在、日本は激動の時代と言われる。大変そうではあるけれども、ひっくり返して、チャンスだけだとも言える。今までの考えが変わる時、長く生きている人はなかなか考えを変えられない。だから、判断を間違えてしまう確率が高い。でも、若い君たちはなにぶん経験がない分、自由に考えることができる。子どものように「なんで？」を連発して、いろいろ考えてもらいたい。

●たけうち・まさよし／東北芸術工科大学教授。(株)みかんぐみ共同主宰。ライブハウス「SHIBUYA-AX」、8代の保育園、2005年愛知万博ではトヨタグループ館、横浜開港150周年記念イベント会場、伊那東小学校を設計。さまざまな建築を手がける。東北芸術工科大学では、サステナブルタウンのための10の提言、「未来の住宅 カーボンニュートラルの教科書」(バジリコ出版)でエコハウスについて研究し、実際に設計、建設をすすめた。近著に「原発と建築家」がある。



鄭國鉉

ソウルデザイン財団総監督

今年も数多くのアイデアが出品され、そこに込められた純粋な夢と、解決していこうとする意思を見出すことができました。その熱気だけでも、すでにこの社会に様々なメッセージを投げかけていると思います。革新という

のは緊張と大きな目標意識から出て来るものだとされているように、より大きな規模の波及のためにはひとつの地域、国家の枠から離れ、アジアそして世界に視野を広げていくべきでしょう。スウェーデンの言語学者で環境運動家であるヘレナ・ノーバーク＝ホッジ氏は、代表作「懐かしい未来：Anciant Future」で伝統的な共同体価値と今日の文明社会の衝突を通して持続可能な新しい未来像を考察しました。

もちろん、すべての問題をひとつの事例として例えるのは難しいと思いますが、産業の弊害を減らし、社会と自然に対する配慮、優しさなど共同体として新しい夢を語り合うのが一番重要だと思います。したがって、「デザセン」のような青少年のみの交流の場は、国家を超えた多国籍活動として位置づけるべきだと思います。

産業化、都市化の否定的な影響を改善し、新しい解決策を提示するのは後世に対する配慮であり、現在を生きている私たちの当然なる義務だと思わなければなりません。私たちはそのような時代的責任を、デザセンという鏡を通してもう一度確認したと思います。

私たちの周りにある数多くの物や人間から操縦されてきた機械は、日常生活の中で本物の同伴者として進化するでしょう。

高齢化社会、すでに人間はより忠実な「Hospitality Solution」としての変化を要求されていると言えます。

これからはひとつの物体の価値より、サービスを提供する見えない心理的安心感と安全、そして温かい社会、配慮をするデザインが多くなることを期待しています。

●Chung Kook-Hyun／1977年サムスン電子入社、2008年

サムスン電子デザイン経営センター副社長、2011年サムスンアートデザイン学校学長、2012年サムスン電子デザイン経営センター常任顧問を経て、2013年より現職。ソウル経済ビジョン2020創造産業分課諮問委員長、国会デザインフォーラム運営委員も務める。2005年米 BusinessWeek 誌 “Stars of Asia” 25人に選定、2007年米インタストリアルデザイナー協会 “IDSA Special Award” を受賞。著書に「デザインで未来を経営する」(共同翻訳)、「未来のための投資、デザイン」(共同執筆)などがある。



中山ダイスケ

アーティスト、アートディレクター／東北芸術工科大学教授

今年もたくさんの興味深い応募があり、審査をさせていただいて幸せでした。エネルギーに関するアイデアや、高齢化に関するアイデアが多かったのは今年の特徴のようです。

ところで皆さん、デザセンというコンテストの締め切りに向けて出品アイデアを考えるのはなかなか大変だったと思います。アイデアというものはひねり出すよりも、ふと湧いてくることが多いものだと思いますか？ そうやってアイデアが湧き出すためには、ちょっとしたエネルギーが必要です。そのエネルギーとは、日頃から貯めておいた「？」の貯金だと思います。「？」の貯金とは、普段から「変だな？」「おかしいな？」「どうしてだろ

う？」と、気になっていることの蓄積です。あたりまえだと思っていることを考え直してみたり、いつもの情景を少し違った角度で見つめてみたり、勝手に組み合わせたり、そんな思考遊びのクセをつけておくと、きっとたくさんの「？」が貯まります。

優勝した「体感トレーニング・ぞうきんがけ世界一周」も、そんな「？」から立ち上がったアイデアだと思います。学校に言われるままに、何も考えずにただ「ぞうきんがけ」をしていたら、それはただ床をきれいするだけの行為です。そうやって、あたりまえの日常に「？」を見つけることはとても楽しいゲームです。そしてそのゲームの最強プレイヤーは、大人と子どもの両方の感覚を持っている高校生の皆さんなのです。

●なかやま・だいすけ／1968年生まれ。武蔵野美術大学でグラフィックデザインを学んだ後、コミュニケーションを主題に多様なインスタレーション作品を発表。1997年より6年間NYを拠点に発表をおこなう。1998年台北、2000年光州、2000年リヨンビエンナーレ日本代表。ファッションショーの演出、舞台美術、店舗のアートディレクションやグラフィックなど、カテゴリーを超えて活動している。



マエキタミヤコ

クリエイティブエージェンシー「サステナ」代表

いま私たちが暮らしている世の中は、もしかしたら、こうじゃなかったかもしれない。そんな空想をしたことはありませんか。もしお母さんとお父さんが出会わなかったら（あなたはこの世の中にいない）。もし東條内閣が開戦を閣議決定しなかったら（日本は敗戦しなかった、かも）。もしステーブ・ジョブスがアップル社に呼び戻されなかったら（スマホはこんなに流行ってなかったかも）。いま暮らしているこの世の中は、「もし」のかたまりです。本当はこうじゃなかった可能性もオオアリ。だからコッチの方がいいかも、こんなのあってもいいかも、そんな「別の道」を考えて提案する人が、この世の中を切り開いているといえるし、そういう人が少ないと、みんなが困ったことになってしまう時代なのです。

皆さんも薄々感じているかもしれませんが、この世はあんまり順風満帆じゃありません。もちろん、皆さんのせいじゃありません。大人たちがイケナイんです。でも親をはじめとする、皆さんを取り巻く優しい大人たちは、皆さんを深く愛しているので、この世の中が実はダメダメなんて口が裂けてもいえません（皆さんが世を偉く思ったらタイヘン！だし）。だから、なんにも不満なんて感じないよ?!と、あなたが思っても不思議じゃないのですが、その優しい大人たちのスクラムの外をチラっと覗いてみてください。そこに何か変なモン落ちてませんか。

今年もそんな落ちてる変なモンを発見して、ちょっとでも世の中よくしようと自分の頭で考え発展させた、優れたアイデアが集まりました。素晴らしいかったです。

高校生はもう大人です。デザセンはアイデア下剋上の世界です。子どもらしく振舞う必要はないという自由を満喫してください。来年はもっと生意気なアイデアが集まりますよう。楽しみにして

います。

●まえきた・みやこ／クリエイティブエージェンシー「サステナ」代表。コピーライター、クリエイティブディレクターとして、97年よりNGOの広告に取り組み、2002年にソーシャルクリエイティブエージェンシー「サステナ」を設立。「エココロ」を通し日々世のなかのエコソフトに奔走中。「100万人のキャンドルナイト」呼びかけ人代表・幹事、「ほっとけない世界のまずしさ」2005年キャンペーン実行委員。京都造形芸術大学・東北芸術工科大学客員教授。「フードマイレージ」キャンペーン、「いきものみつけ」「エネシフジャパン」「グリーンアクトティブ、緑の日本」「エコ議員つうしんぼ」「発禁新聞」「サステナ・クラウドファンディング」「デモクラTV・えっそれは知らなかったジャーナル」をてがける。デモクラTVレギュラーコメンテーター。



前田哲

映画監督／東北芸術工科大学准教授

もしも、世界中の学校で日常的に、「ぞうきんがけ」をしている子どもたちがいたら…、なんだか楽しそうな子どもたちの姿が浮かび、子どもたちの声が届いてきます。

もしも、世界中の人々が日常的に、「レインボーカラー」のグッズを使用したり、身につけていたら…、初対面の人に話しかけるきっかけになったり、会話が弾んだりしている姿が見えてきます。その姿を、その世界を、想像させてくれる「デザ

イン」は、とてもワクワクします。

何よりも、世の中を変えてくれる力を感じさせてくれて、幸せな気分になります。

何に対しても、「発見」や「驚き」を見つけることが、アイデアの源であり、デザインの種になると思います。

それは、普段何気なく目にしていることや、当たり前のようにしていることから、「何でだろう？」「何だろう、これは？」と、ひっきりや違和感を感じたり、疑問に思ったことから始まります。今私たちが生きる「現実」は、「違う現実」になっていたかもしれない可能性があったと想像できるか。

そこに、人を、社会を、世界を、変えていくヒントが隠されていると思います。未来を今とは違う現実に、「デザイン」していくのは、君たち自身です。

●まえた・てつ／1998年に『ホッキー坂恋物語〜かわいいひと』エピソード3で劇場映画デビュー。主な映画作品として、『sWinG maNs』(2000)、『バコタテ人』(2002)、『棒たおし!』(2003)、『ドルフィンブルー フジもうちど宙へ』(2007)。妻夫木聡主演『ブタがいた教室』(2008)で、第21回東京国際映画祭のコンペティション部門観客賞とTOYOTA Earth Grand Prix 審査員賞をW受賞。近作に『猿ロック』(2009)、『極道めし』(2011)、『王様とボク』(2012)、『旅の贈りもの明日へ』(2012)など。CM、ミュージックビデオ、TVドラマも多数演出。

入賞校の先生方の声



伊東高等学校
城ヶ崎分校
大津忍 教諭
Shinobu Otsu

今回で8回目の出場となった決勝大会、いつものことながら、これが選ばれたらどうしたらよいのか、というテーマが選ばれてしまいました。生徒たちと頭を抱え、これはもうぞうきんがけをやるしかないよな、ということで今回のプレゼンになったわけですが、正直な話、ぞうきんがけがあればほどの支持を受けるとは思ってもみませんでした。シナリオ作りの段階ではあれもこれも、という内容から削りに削って、なんとか7分に縮めたのが大会の2日前くらいだったと思います。本校からの男子生徒の出場は初めてで、普段の部活内でも女子に押しまくられているという、プレゼンの内容がそのままの3人の普段の姿なので、監督の立場から言えば3人の個性を上手く引き出すことができたのではないかと思っています。本校の今年度の入学生は40人定員で26人でした。今回の生徒たちの活躍が学校の活力を取り戻す原動力になってくれたのではないかと、この大会に感謝しています。



岐阜総合学園
高等学校
石井正人 教諭
Masato Ishii

デザセンの決勝大会は面白い、3年前に参加してからそう思うようになりました。大舞台での発表、学生スタッフの熱意、審査員からのコメントなど、10代の学生にはよい刺激になります。だから、生徒に体験させたいという想いで指導してきました。今回参加したのはすべて1年生。地方自治の問題にたどり着きましたが、そこからが苦難の道。パネルへのまとめ方、プレゼンの方法、わからないことだらけで沢山の苦労をしました。山形へ出発する時も納得のできるプレゼンは1度もできない状態でした。しかし会場で学生スタッフの熱意が伝わってきて、一気に成長。なんとか失敗なく発表を終わらせ、多くの方に評価してもらうことができました。担当スタッフも自分のことのように喜んでくれました。前回参加した生徒より、大きく成長した姿がありました。決勝で評価されるのがこれからの目標になった瞬間です。今回の経験をさせてくれた関係者の方々には、本当に感謝しています。



市川工業
高等学校
金子裕行 教諭
Hiroyuki Kaneko

インテリア科3年生は、生徒の希望をもとに、ファニチャー、デザイン、CAD情報の3コースの実習科目に分かれます。今回決勝大会に出場することになった3名は、デザインコースのメンバーです。デザインコースは、総勢6名。この6名が今年度のデザセンにチャレンジし、2チームが応募、その中の1チームが見事、決勝大会出場の切符を勝ち取りました。デザセンは毎年、課題研究という科目で取り組んでいる大事なテーマのひとつで、今年の5月頃からスタートしました。今回の決勝大会進出は、6名全員が一丸となって「最後まであきらめない」をテーマに取り組んだ成果であると私は考えています。結果発表からの約1ヶ月半、落選した3名はサポート役に徹し、自分たちは決勝大会には出場できないけれども、出場する3人のためにバックアップしたい。よい物を作り上げたい。という気持ちで頑張りました。今回出場した3名とバックアップの3名全員が、悔いの残らないよう、デザセンのプレゼンに全力で取り組み、そして全力で楽しむことができたことを何よりも嬉しく思います。全国第3位。LGBTとう難しいテーマに果敢にチャレンジし、堂々と7分間のプレゼンをやり遂げた生徒たちはとても立派でした。デザセン事務局並びにデザセンを陰で支えてくれた学生スタッフ全員に心から感謝申し上げます。本当にお世話になりました。ありがとうございました。



北海道札幌平岸
高等学校
吉岡隆 教諭
Takashi Yoshioka

4年ぶりに決勝大会に出場して、決勝大会を見ることができて感慨深い気持ちでした。最近、気がついたことですが、デザセンはユネスコスクールのESD(持続可能な発展のための教育)と共通点があり、校内で発表会を行い、ただ応募するだけでない工夫も行ってみました。そういう視点で見ると「地球絵日記」の提案は興味深いテーマであったと思います。生徒たちも限られた時間で準備をして、スタッフや学生サポートの皆さんのお陰で無事発表することができたと思います。これからもデザセンでは高校生の様々なアイデアが出てくると思いますが、応募された皆さんのアイデアがデータベースに登録されて、共有される仕組みがあったり、全国各地でデザセンの発表を見ることができた面白いだろうなと思いつ、来年以降の取り組み方を考えて行きたいと思います。スタッフの皆さん、出場校の皆さん、お世話になりました。



東京都立総合
工科高等学校
久世佳史 教諭
Yoshifumi Kuze

「デザセンを経験することで、人はこれほど大きく変わるのか」。2回決勝戦まで参加して毎回感じることは、その一言に尽きます。短い間でも学校生活だけではできない成長があり、また多くの発見と収穫が、生徒・教員ともにあります。普段は、発表どころか人前で会話することすら逃げてしまう生徒が、これほど堂々とできるようになるとは思っていませんでした。どうしても普段の生活では「今まで育んできたもの」と「持って生まれたもの」に頼ってしまいます。ですが、可能性は持って生まれた能力ではなく、行動する機会と周りの環境が育てるものなのだと、今回の3人の活躍を見て深く感じました。現在の生徒たちは、デザセンで発表した「コミックダイアリー」を使って、小中学校を開くことを計画しています。また、青年海外協力隊のOBの皆さんに相談し、海外での展開を計画中です。自ら行動する力を身に着ることができたことも、今回の大きな収穫と成長でした。ありがとうございました。



静岡県立
科学技術高等学校
秋山純子 教諭
Junko Akiyama

今回の決勝大会は、建築デザイン科2年生3人が建築研究部で日夜、建築と真剣に向き合い、取り組んだ決勝大会でした。本校の文化祭と日程が重なってしまい、部活動顧問として普段生徒たちを指導されている藤井邦光先生は引率することができず、大会直前に急遽私が関わらせていただくことになりました。建築デザイン科の教員として日の浅い私には、この様な大規模な大会への参加も初めてで指導力不足に心苦しい状況でしたが、日頃部活内で厳しく薫陶を受けている生徒たちは、課題に追われる忙しい日々の中でも淡々と準備を進めていました。生徒たちの自主性や集中力、本番で実力を出し切る姿に私も感動を覚えました。本大会を通じて3人は大きく成長したと思います。この素晴らしい大会を通じて多くのことを学ばせていただき、本当にありがとうございました。大会を支える事務局や学生スタッフの皆さん、特に米澤さん、青柳さん、及川さんの温かく、こまやかな心配りに対し、心から感謝申し上げます。



大阪市立
中央高等学校
安東裕二 教諭
Yuji Ando

定時に転動早々、「デザセン」VTRを披露。生徒にとっては、遙か遠い山形の風景。淀商では初出場まで5年。夢のような山形切符は、生徒とともに学校、そして私自身大きな宝物になりました。台本提出はおろかポスター写真すら満足に送れず、事務局・大会スタッフの皆さんには迷惑の掛け通し。感謝の言葉しかありません。「予定調和でなく予想を裏切るようなプレゼンに期待」という大会要望に応えようと、リアルな会場アンケート方式を採用。セリフはその場の一般回答の結果を見て、臨機応変に対応できるかに冷や汗…。この難しいプレゼンに挑戦した中央生よ、あっぱれ！結果は残念でしたが、新風をあの手で送りこめたのではと自負。サポーターの大友君、ほーりーさん、ぐっと堪えて支えてくれたありがとう。小笠原君、連続指名の再会に涙。ほんまに助けられました。残念会の久世先生、森永先生また会いましょう！最後に、静岡古材バイオマス檜の香りは永遠…。



米子工業
高等専門学校
西川賢治 教諭
Kenji Nishikawa

まさかの決勝進出が決まり、さてどんなプレゼンをするのか。チームから出てきた方針は、予定調和的なものはやりたくない。新しいスタイルのプレゼンを目指すというものでした。ならば、先ず企画を自分たちで試行して、問題点を把握しておくべきでは、と注文を出しました。すると、チームは自分たちで地元商店街にアポイントメントを取り、企画を試行する模擬実験の了承を取り付けてきました。仲間に声をかけて参加者を集め、注文を出してから10日ある行動力に感心しましたが、この後、チームは模擬実験映像を中心にしたテレビのワイドショー番組風プレゼン作りでしたが、新風をあの手で送りこめたのではと自負。サポーターの大友君、ほーりーさん、ぐっと堪えて支えてくれたありがとう。小笠原君、連続指名の再会に涙。ほんまに助けられました。残念会の久世先生、森永先生また会いましょう！最後に、静岡古材バイオマス檜の香りは永遠…。



有田工業
高等学校
森永昌樹 教諭
Masaki Morinaga

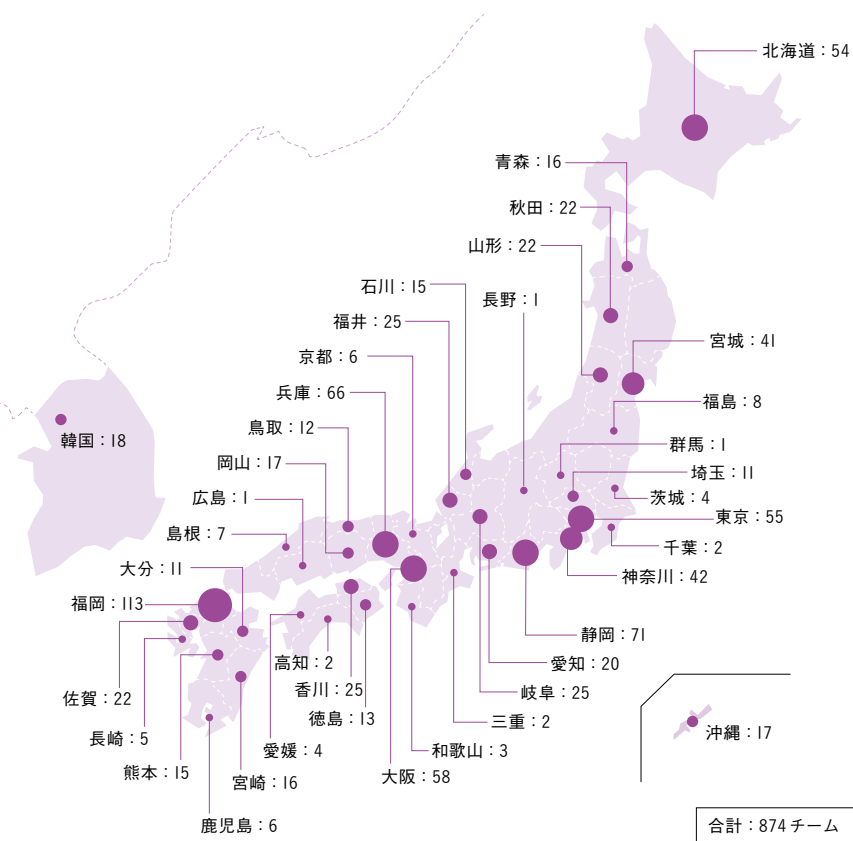
本校はデザセン常連校と言われ、生徒たちは大きなプレッシャーのもと、不安を抱えながら決勝大会に挑みました。本校伝統？の出席番号順でチームを割り振った今回の3人組は、3年間同じクラスでありながら殆ど会話のないメンバーでした。決勝大会出場決定後、事務局からの指示に導かれながら準備を進めていく中で、各々が殻を破り成長していく様子が窺えました。大会の結果を各々で受けとめ、今後にどう活かすかが3人の新たな課題なのだと思います。特に学生サポーターの2人には感謝しております。学校でも縦社会のつながりが弱くなっている昨今、世代の近いサポーターから、心を揺るがしたり、安心感を与える緩急の効いたアドバイスをいただき、貴重な体験をさせていただきました。個人的には、他校の先生方とも意見交換ができたことが何よりの収穫でした。今、何が求められているのかを考えること。また、その伝え方を学べるこの大会の趣旨を改めて教えられた4日間でした。ありがとうございました。

大会資料1 データでキャッチ、高校生の参加状況。

回を重ねる毎に、確かな広がりを見せてきているデザイン選手権大会。データをもとに、参加した高校生の全体像を探ってみました。

● 応募チーム数

第21回大会には、国内では93校(39都道府県)から、856チームの応募がありました。韓国から13校・18チームの応募も加え、応募チーム数の合計は874チーム。今年も約2,500人の高校生が取り組んでくれたこととなります。



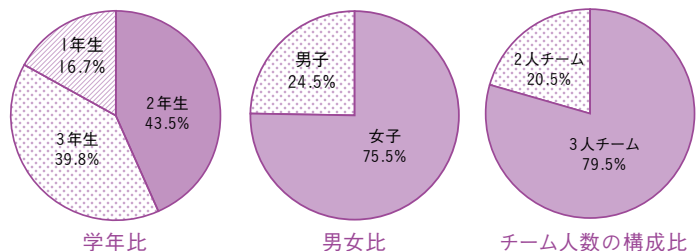
● 特に多く寄せられたテーマ

- 1位 人間関係やコミュニケーションに関するもの
- 2位 学校生活や勉強など教育に関するもの
〃 新しい製品や技術的なアイデアに関するもの
- 4位 ゴミリサイクル、環境保護などのエコロジーに関するもの
- 5位 身体や心の健康、医療・福祉に関するもの
- 6位 身の周りの生活や暮らしの工夫などに関するもの
- 7位 食事や食品、農業などに関するもの
- 8位 自転車や通学環境など、交通システムに関するもの
- 9位 まちの活性化やコミュニティなど地域社会に関するもの
- 10位 子どもの遊びや子育てなどに関するもの
〃 防災や防犯など、安全・安心に関するもの

毎年順位の変動はありますが、提案数にそれほど差はありません。上記に含まれないような新しいテーマも大歓迎です。あまり傾向にとらわれずに、「自分がいちばん関心のあるモノゴト」を発見し、じっくり取り組むことが大切です。

● 学年比・男女比・チーム人数の構成比

学年比では、ここ数年増え続けて来た2年生の割合が、今回ついに3年生を抜き、半数近くを占める勢いです。1年生の割合も徐々に増え、低学年から取り組まれている傾向が見られます。男女比・チーム人数の構成比では、男子・2人チームの数が例年の傾向に戻りつつあります。



大会資料2 第21回大会募集要項

この募集要項は、2014年に開催した第21回大会のものです。ご応募いただく際には、最新の募集要項をご確認ください。

★ テーマ

『明日の社会を見つめ、明日の世界を創造する』
高校生の視点で、社会や暮らしのなかから問題・課題を見つけ、その解決方法をわかりやすく提案してください。

★ 応募資格

同じ高校に通う2名もしくは3名で1チームとし、1チーム・1提案で応募してください。 ※1

- 1校から何チームでも応募できます。
 - チームを構成するメンバーが1名でも異なれば、別のチームとみなします。これにより、1人で複数の応募ができます。
 - 同じ高校であれば、学年や男女の構成などは自由です。
 - 高等専門学校の場合は、3年生まで参加できます。
- ※決勝大会(最終審査)では、2名のチームに限り、同じ高校に通う1名をプレゼンテーションの「サポート」役として加えることが可能です。

★ 応募方法

下記の提出物を受付期間内に大会事務局に到着するよう郵便等でお送りください。

[一次審査]

1. 応募用紙

大会ホームページから「応募用紙(PDFもしくはWord)」を出力し、すべての欄に記入してください。

2. 企画書

大会ホームページから「企画書フォーマット(PDFもしくはWord)」を出力し、提案の内容について項目に沿って記入してください。

応募用紙を企画書の上に重ね、左上をホチキス留めして、受付期間内に大会事務局に到着するよう郵便等でお送りください。

◎受付期間：2014年4月1日(火)～7月2日(水)当日消印有効 ※ 応募用紙・企画書は「A4サイズ」の用紙に印刷してください。

[二次審査](一次審査通過チームのみ) ※2

- 提案の内容をパネルにわかりやすく平面で表現してください。文章・イラスト・図表・写真など表現方法は自由です。
 - パネルは、A2サイズ(縦420mm×横594mm)2枚(片面)を横位置で使用してください。
 - パネルには以下の内容を必ず記載してください。
*提案のタイトル
*見つけた問題の現状(なぜ問題となっているのか)
*具体的な問題の解決方法
*解決方法を実施すると、社会はどう変わるか
- これらの内容を含んだ上で、自由に表現してください。

- パネルには折れ曲がらない程度に厚みのあるもの(イラストボードやスチレンボードなど)を使用してください。
- 立体物を貼付したもの、出力したままのロール紙、水張りした木製パネルなどは不可とします。

◎受付期間：一次審査結果通知日～2014年9月3日(水)必着

★ 審査

1. 一次審査

応募された「企画書」で一次審査を行います。審査結果は応募校の指導教員宛に7月15日(火)頃に発送し、一次審査通過チームには二次審査についての詳しい要項を同封いたします。

2. 二次審査

一次審査通過チームから提出された「提案パネル」で二次審査を行い、入賞10チーム、入選30チームを

選びます。

※全国をブロックに分け、韓国も含めて地区ごとに審査する予定です。

入賞10チームには決勝大会(最終審査)の詳しい要項をお送りいたします。審査結果は9月12日(金)頃に大会ホームページでも発表します。

3. 決勝大会(最終審査)

入賞10チームは、東北芸術工科大学を会場として行う決勝大会(最終審査)で、提案の内容を具体的にプレゼンテーションします。制限時間は7分間です。発表後、審査員との質疑応答があります。

◎開催日：2014年10月26日(日) ※24日(金)はガイダンス、25日(土)はリハーサルとなります。

◎会場：東北芸術工科大学(山形県山形市)

- 表彰式は、大会当日の公開プレゼンテーション終了後、同会場で行います。
- プレゼンテーションの準備費用として、1チームにつき2万円を助成します。
- チーム3名と引率教員1名の交通費・宿泊費は、大会事務局が負担します。

★ 審査基準

以下の「デザイン力」を審査し、総合的に優れた提案を評価します。

- 問題発見力、分析力
- 発想力、企画・構想力、独創性
- 表現力、説得力
- 実現可能性

★ 表彰

優勝[文部科学大臣賞](1チーム)
……………優勝旗、トロフィー、賞状、副賞(24万円相当)

準優勝(1チーム) ……トロフィー、賞状、副賞(12万円相当)
第三位(1チーム) ……トロフィー、賞状、副賞(6万円相当)
※上位入賞3チームは、ソウルで行われるデザイン交流プログラムに招待されます(ただし、日本国内旅費は自己負担)。

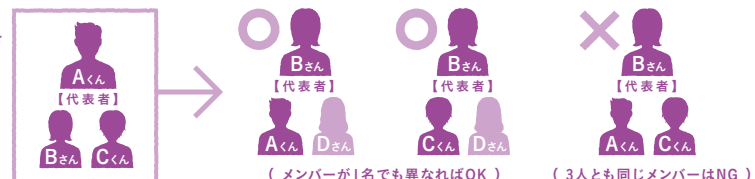
市民賞(1チーム) ……賞状、副賞(3万円相当)
大学生賞(1チーム) ……賞状、副賞(3万円相当)
高校生賞(1チーム) ……賞状、副賞(3万円相当)
入賞(4～7チーム) ……賞状、副賞(1万5千円相当)
入選(30チーム) ……賞状
学校賞(入賞・入選を果たした高校) ……賞状、副賞(教育費として1万円相当)

※その他、特別賞が設定される場合もあります。上記の表彰とは別に、商品化・サービス化の実現可能性を検討します。

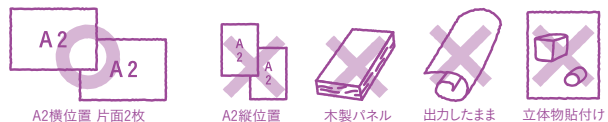
★ 応募に関する留意事項

- 提案内容は、応募者自身のオリジナルに限り、提出物の送付にかかる費用はすべて応募者でご負担ください。また送付時に破損などが発生しても主催者は一切の責任を負いません。厳重に梱包してお送りください。
- 提案内容に関する全ての知的財産権は応募者にあります。ただし、入賞・入選提案を大会ホームページ、または主催者が発行する各種媒体で発表するほか、報道機関に対しプレスリリースなどで受賞情報を提供します。なお、商品化などに発展した際の権利関係は、実態に合わせて関係者間で協議する場合があります。
- 募集要項の掲載事項を諸事情により変更する場合がありますので、予めご了承ください。

※1 同じ高校の3人チームの場合



※2



大会資料3 関連記事

デザイン選手権大会が新聞等で取り上げられ、紹介されました。

山形新聞社提供 2014年10月27日付



城ヶ崎分校のアイデア全国V

伊東市の県立伊東高城ヶ崎分校の芸術部員3人が、第12回全国高校デザイン選手権大会（主催者サゼン、東北芸術工科大学）で、文部科学省・経済産業省が主催する「雑巾がけ」部門で、市民、学生ら約200人が観戦した。伊東市立伊東高城ヶ崎分校の芸術部員3人が、第12回全国高校デザイン選手権大会（主催者サゼン、東北芸術工科大学）で、文部科学省・経済産業省が主催する「雑巾がけ」部門で、市民、学生ら約200人が観戦した。伊東市立伊東高城ヶ崎分校の芸術部員3人が、第12回全国高校デザイン選手権大会（主催者サゼン、東北芸術工科大学）で、文部科学省・経済産業省が主催する「雑巾がけ」部門で、市民、学生ら約200人が観戦した。

静岡新聞社提供 2014年10月31日付



伊豆新聞社提供 2014年10月27日付

雑巾がけで体力向上 高校デザイン「信じられない」

伊東市の県立伊東高城ヶ崎分校の芸術部員3人が、第12回全国高校デザイン選手権大会（主催者サゼン、東北芸術工科大学）で、文部科学省・経済産業省が主催する「雑巾がけ」部門で、市民、学生ら約200人が観戦した。伊東市立伊東高城ヶ崎分校の芸術部員3人が、第12回全国高校デザイン選手権大会（主催者サゼン、東北芸術工科大学）で、文部科学省・経済産業省が主催する「雑巾がけ」部門で、市民、学生ら約200人が観戦した。

社会課題 解決策競う全国大会
大会は山形市の東北芸術工科大学で開催され、全国の高校から約100校が参加した。伊東市立伊東高城ヶ崎分校の芸術部員3人が、第12回全国高校デザイン選手権大会（主催者サゼン、東北芸術工科大学）で、文部科学省・経済産業省が主催する「雑巾がけ」部門で、市民、学生ら約200人が観戦した。



朝日新聞社提供 2014年12月05日付




岐阜新聞社提供 2014年12月14日付

中日新聞社提供 2014年11月25日付



朝日新聞社提供 2014年11月11日付



デザセンの スタッフたち

デザセン決勝大会の運営は毎年、東北芸術工科大学の在学生有志たち約60名程が行っています。出場チームの舞台装置をすばやく的確に設置・転換する大道具チーム、出演直前の高校生にステージ上で必要なものを装着するサポート業務を行う小道具チーム、シナリオに沿って音響やマイクの音を調整するPAチーム、会場やネットに配信する映像を撮影する撮影チーム、出場チームの提案内容のブラッシュアップ、プレゼン練習のサポートを総合的に行うチームサポートチームの5つの役割があり、どのチームも大会運営になくてはならない役割を果たしています。

芸術やデザインを学ぶ彼らが、社会に役立つ「デザイン思考」とは何かを、自分たちよりもさらに若い高校生の型にはまらない提案内容を見聞きしながら考える。本大会は、高校生のフレッシュなアイデアを披露する場であると同時に、本学の理念「新しい世界観を創造する人材を育てる」に直結する在学生たちの学びの場ともなっています。



全国高等学校デザイン選手権大会開催委員会

会長 宮島達男(東北芸術工科大学副学長)
委員 根岸吉太郎(東北芸術工科大学学長)
片上義則(東北芸術工科大学副学長/デザイン工学部長)
白杉悦雄(東北芸術工科大学研究科長)
木原正徳(東北芸術工科大学芸術学部長)
五十嵐眞二(東北芸術工科大学常務理事/事務局長)
野村真司(東北芸術工科大学総務担当常務理事)
高久正史(東北芸術工科大学財務担当常務理事)
名誉顧問 長澤忠徳(カルチュラル・エンジニア/武蔵野美術大学教授)

全国高等学校デザイン選手権大会事務局

加藤芳彦/樋口雅子/須藤知美/谷川佳代子/役野友美

学生スタッフ

代表 佐藤寛人
副代表 武田香葉子
大道具 佐藤城児(チーフ)/石川和輝/大島宗則/金辰彦/渡邊啓太
新田さくら/押山桃子/加藤楓/橋本正哉/中川朋彦
小道具 晴山杏奈(チーフ)/大槻美友/工藤月華/庄子夏海/八嶽佑衣
PA 工藤嶺也(チーフ)/小野慎司/浪岡恭平/高砂満里奈
伊藤早希/白河麻季子
撮影 布施拓哉(チーフ)/石川純一/伊東大毅/工藤有希
佐藤駿太郎/積唯人/八巻一則

チームサポート



高橋櫻(チーフ)
大江さち乃/中村彩夏(北海道札幌岸高等学校)
榎原智美/伊藤彩香/渡邊紀子(市川工業高等学校)
内ヶ崎美奈/角田里奈(総合工科高等学校)
安部絵莉奈/八島彩花(岐阜総合学園高等学校)
山下摩琴/色摩かな子(伊東高等学校城ヶ崎分校)
米澤みちる/青柳ゆりえ/及川夏希(静岡県立科学技術高等学校)
大友爽登/小笠原裕一/木村梨穂(大阪市立中央高等学校)
佐藤万美/菊地真由(米子工業高等専門学校)
山科晴佳/森義澄(有田工業高等学校)

運営協力

柳井麻希(決勝大会司会)/村山秀明(機材調整・映像監督)
須貝太郎(リハーサル・PA監督)/叶内智(機材調整)

主催・後援・協賛・協力

主催:東北芸術工科大学
後援:文部科学省/経済産業省/山形県/山形市
全国都道府県教育長協議会/全国高等学校長協会
公益社団法人全国高等学校文化連盟/公益社団法人全国工業高等学校長協会
全国商業高等学校長協会/公益財団法人全国商業高等学校協会
全国高校デザイン教育研究会/日本私立中学高等学校連合会
日本デザイン学会/芸術工学会/基礎デザイン学会
社団法人日本インダストリアルデザイナー協会/公益財団法人日本デザイン振興会
一般社団法人日本デザインコンサルタント協会
NPO法人山形県デザインネットワーク

協賛:トップツアー株式会社 
協力:株式会社ドワンゴ 

発行

発行日:2015年3月1日
発行:東北芸術工科大学
デザイン:奥山千賀(株式会社フロット)
撮影:志鎌康平(アカオニデザイン)/後藤大輝
印刷:田宮印刷株式会社



デザセン2014 REVIEW

全国高等学校デザイン選手権大会事務局

〒990-9530 山形県山形市上桜田3-4-5 東北芸術工科大学

TEL : 023-627-2139 FAX : 023-627-2185

EMAIL : dezasen@aga.tuad.ac.jp

URL : <http://www.tuad.ac.jp/dezasen/>



TOHOKU UNIVERSITY
OF ART & DESIGN

過去大会の報告書、パンフレット、プレゼンテーションを収録したDVDを
無償配布しておりますので、ご希望の方は大会事務局までお問い合わせください。